慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「帥大伴卿歌五首」の趣向と作意
Sub Title	
Author	胡, 志昴(Ko, Shiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication	1990
year	
Jtitle	三田國文 No.13 (1990. 6) ,p.17- 25
JaLC DOI	10.14991/002.19900600-0017
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00296083-19900600-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「帥大伴卿歌五首」の趣向と作意

胡 志 昂

一 はじめに

が、確かに、これらは単なる編纂資料の違いを示しているというよが重きを成している。この一連を同一の雅宴の作とする見方もあるがある。前半に大宰帥大伴旅人の歌五首、後半に彼の讃酒歌十三首万葉集巻三雑歌の部に筑紫歌群といわれる一団(三二八~三五一)

うるのであろう。り、一歌群として何らかの内的な繋がりを有することは十分に考えり、一歌群として何らかの内的な繋がりを有することは十分に考え

られている。 中で、「帥大伴卿歌五首」と題する五首の歌は、次のように 並 ベーロで、「帥大伴卿歌五首」と題する五首の歌は、次のように 並べ

②我が命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて 見 む た めむ (三三一)

(三三三) ③浅茅原つばらつばらに物念へば故りにし郷し思ほゆるかも

④忘れ草我が紐に付く香具山の故りにし里を忘れ む が た め

(三三四)

⑤我が行きは久にはあらじ夢のわだ瀬にはならずて淵にあらぬ

讃酒歌との関連から旅人の教養を考慮に入れ五首の表現を通して作摘が少なくない。これら先達の学恩に負いつつ、小稿は、主としてじられてきた。また諸注にも個々の歌につき歌人の心中に触れる指 一る嗟歎と懐舊の情を九州遠任中の作者の境遇や想念と結び付けて論 17右の五首は旅人の望郷歌とも称せられ、これまで歌中に流露す 一かも (三三五)

二 望京の憂愁

歌の趣向と作意について考えてみたい。

二首が並んでいる。 旅人歌五首の前に大宰少貳小野老の歌一首と防人司祐大伴四綱の

やすみししわご大君の敷きませる国の中には京師し思ほゆ(三二八)

そ、0月……・これはこれ 「「これない」には、100~)、藤波の花は盛りになりにけり平城の京を思ほすや君(三三〇)

こと続日本記に見える。三二八はその老を迎えて開かれた宴会の席旅人の帥在任中、天平元年三月四日に老が従五位上に叙せられた

ものだが、歌中望京に纒わる嗟敷と憂愁を強く吐露し、三首の流れさて、五首の①は、先学の指摘通り老・四綱の歌を受けて答えた強く表し、続く三三○では同席の首長帥に望京の念を問いかけた。上披露されたものと見られる。そして四綱は三二九で都への思念を上披露されたものと見られる。そして四綱は三二九で都への思念をこと終日本計に与える。三(3)

戻りはしまいというのである。歌語「変若(をつ)」は、集中「また仕えていた華やかな時代への懐想があったに違いない。それが再び

もしれない。いずれにせよ、作者の教養を考えれば、⑴の初二句は花落)といった詩句があり、旅人は或いは詩の表現を意識したのか年忽我道」(曹植・箜篌引)「盛年不再得、高枝難 重 攀」(王勃・落るのは旅人のみである。思えば、文選や初唐詩に「盛年不可再、百するものはあるが、反語表現をもって我が盛りの衰退を強く悲歎す変若ちかへり」「をちえてしかも」というふうに若返りの祈願を表象変若ちかへり」「をちえてしかも」というふうに若返りの祈願を表象

それがゆえに、歌人は盛える京へ帰れないだろうと危惧するのでの無常観において歌ったのに違いはあるまい。

詩二首・其一)

それらの詩句と同様、単に老いという事象を越えて人生の栄枯盛衰

推量であり、現実性の高い事象への心残りまたは嘆きの 表 現 で あ七二二)といった類句に見るように、事実に基づく根拠があっての見えずかあらむ」(七八)「河浪高み瀧のうらを見ずかなりなむ」(一ある。「見ずかなりなむ」ということは、「置きて去なば君が辺りはそれがゆえに、歌人は盛える京へ帰れないだろうと危惧するので

る。換言すれば即ち、我が盛りの衰退という事実が変らぬ限り帰京

る作者の切実な憂愁と不安を見ることが許されよう。できない可能性が極めて高いということになる。ここに望京に関わ

一体、羇旅作の多い万葉集中家郷を思う歌は少なくないが、

に見出しのののである。、かぎの大に売して詳ませらなまりに引から良遷都後唐風の京城制度の整備に伴う風雅の意識の高揚と相俟っいう形でいわば政治・文化の中心としての都を思い慕う望京歌は、多くは抒情が大和・家・妹に向けられている。「国の中に は 都」と

青ま文展亍を寺こ見える望京寺と領想すると指摘される。 項恵すべ中西進氏は老らの望京詠に触れ、その繁華極まる京師の描写と慕とも言われる。 (4) て現出するもののようで、小野老の歌に続く一群はその代表的な例

満涘望長安、河陽視京縣。白日麗飛甍、参差皆可見。餘霞散成きであろう。因みに氏の挙げられた情は文選行旅詩に見える望京詩と類想すると指摘される。傾聴すべ

(謝玄暉・晩登三山還望京邑)罷歎宴。佳期悵何許、涙下如流霰。有情知望郷、誰能縝不變。絹歎宴。佳期悵何許、涙下如流霰。有情知望郷、誰能縝不變。綺、澄江静如練。喧鳥覆春洲、雜英滿芳甸。去矣方滞淫、懐哉

18

という一首の冒頭二句で、これに先立つ望京詩として次の二作を踏

霸陵岸、廻首望長安。悟彼下泉人、喟然傷 心 肝。(王粲・七哀西京亂無象、豺虎方遘患。復棄中国去、遠身適荆蠻。……南登まえている。

凱風揚微綃。洪流何浩蕩、脩芒鬱苕嶢。誰謂晋京遠、室邇身実野田蓬、斡流随風飄。昔倦都邑游、今掌河朔傜。登城眷南顧、……卑高亦何常、升降在一朝。徒恨良時泰、小人道遂消。譬如

いずれも文選に見える連作だが、王粲詩は漢末の乱に遭って荆州

いて王粲詩と一脈相通ずるものがある。 いて王粲詩と一脈相通ずるものがある。 いて王粲詩と一脈相通ずるものがある。 いて王粲詩と一脈相通ずるものがある。 いて王粲詩と一脈相通ずるものがある。 いて王粲詩と一脈相通ずるものがある。 いて王粲詩と一脈相通ずるものがある。 いて王粲詩と一脈相通ずるものがある。

出せる。

ることも念頭においてよい」といい、極めて適切な指摘というべき(1)について当時「中央では藤原氏一族のみが多く時めいた時代であ境を強く吐露したものと思われる。土屋文明氏(万葉集私注)は、らと繋がりながら、その上詩人と似たような境遇にあった自らの心強を強く吐露したものと思われる。土屋文明氏(万葉集私注)は、らと繋がりながら、その上詩人と似たような境遇にあった自らの心強を強く吐露したないたはずである。従って、彼が老らの歌を受けむしろ望京の悲愁をいたはずである。従って、彼が老らの歌を受けむしろ望京の悲愁をいたはずである。

ものでなければならぬのであろう。を成すもので、続く吉野・飛鳥へと展開する抒情の指向を規定するを成すもので、続く吉野・飛鳥へと展開する抒情の指向を規定するとして、①の表現の基底に何われる作者の心境は五首一群の基調

三 吉野を歌うことは

権の神聖性を声高に歌いあげている。今一つは吉野の神性や柘枝伝朝発祥の地としての離宮吉野で、人磨等の従駕作がこれにつけ、皇上代文学に於ける吉野は凡そ二つのイメージをもつ。一つは天武

(藤原麻呂)といった俗世離れ権力離れの一面を帯びることが 見 い「放曠多幽趣、超然少俗廛」(丹墀廣成)「友非干禄友、賓是飡霞賓」懐風藻の漢詩に多く詠まれ、そして遊仙思想との関係か ら 観 念 上説とも絡んで清浄な山水に寄せられた仙郷観である。これはむしろ

と同様、例えば、
吉野詩に見る智山仁水の類型に従駕歌の離宮聖地観が関係している吉野詩に見る智山仁水の類型に従駕歌の離宮聖地観が関係している影響などについて、すでに中西進氏の精到な論考がある。思えば、影響などについて、すでに中西進氏の精到な論考がある。

う。() であるのも神仙思想に因む仙郷観が滲透した結 果 で あろれてのを求めるのも神仙思想に因む仙郷観が滲透した結 果 で あろをいう笠金村の従駕作の反歌に見たように、吉野の山水につけて長という笠金村の従駕作の反歌に見たように、吉野の山水につけて長い、

のわだ瀬にはならずて淵にあらぬかも」と吉野に不変を求めるのとい。だから②に「昔見し象の小河に」と彼の吉野従駕作の反歌(三一六)に見る類句が用いられ、そこに従駕して吉野へ何度か行った過去への追懐ひいては白鳳治世への追慕が込められていると見られる。同時に歌人は「我が命も常にあらぬか」と命の恒久を希い、吉る。同時に歌人は「我が命も常にあらぬか」と命の恒久を希い、吉る。同時に歌人は「我が命も常にあらぬか」と帝の恒久を希い、吉と聖地と清浄な仙郷という両方のイメージが詩想にあったに違いな宮聖地と清浄な仙郷という両方のイメージが詩想にあったに違いな宮聖地と清浄な仙郷という両方のイメージが詩想にあずいるのと、

陛下御宇、于今九載、仁流秋津洲之外、恵茂筑波山之蔭・淵変淵瀬の更替という表現は古今集に下ると、例えば真名序に

同じ発想である。

為瀬之声、寂々閉口、砂長為巖之頌、 洋々満耳

し、・・・・・・・・・という風に治世に関わる世間無常を表わす典型になるが、という風に治世に関わる世間無常を表わす典型になるが、 に過ぎない。一方、漢文作品で自然地形の変動に世の無常を象徴さ に淀む水から逝く水の無常を裏返しに歌ったのと一縷の類想を見る 「志賀の大曲淀むとも昔の人にまた逢はめやも」(三一)といい、 似た表現は旅人以外に見当らず、僅かに人麿の近江荒都歌の反歌に 万葉歌中

淵

の象徴的表現に流用されている。また神仙譚にも(9) 麻姑謂王方平曰、自接侍以来、見東海三為桑田、 向到蓬萊、 水

所以陵谷更変、人無定期」と見える。これは周知の如くもとは小雅 せる表象は憶良(「悲歎俗道假合即離易去難留詩」)に「世無恒質、

(十月之交)に出るものであるが、後に政治、自然を含む常な き 世

譬えるこの物語りは上代人にもよく知られていたであろう。 という話がある。恒久なる蓬萊仙境に対し無常なる世を滄桑の変で 吉野に淵瀬の不変を希うのはそれが仙郷だからにほかならない。そ 乃浅於往者略半也、豈復為陵乎(神仙伝・王方平) 旅人が

心情が汲み取れよう。 に永久の願いを托すそこに、作者の無常の世間を脱出しようとする して望京につけ「我が盛りまた変若ちめやも」と悲 嘆 し、帰 京 を 「我が行きは久にはあらじ」と予期しながら、都を歌わず吉野 仙 境

鋭い洞察である。旅人は仙郷の山水に俗世を脱却し我が身を全うす る道を求めるのであり、これは遊仙思想が流れ込む行旅詩とも軌を して、自然の風光に対し逃路を求めてゐた心が窺われる」と評し、 にするもののように思われるのである 窪田空穂(万葉集評訳)は、 (5)につき「これは人生的の面には失望

文選・行旅詩に

神仙郷を求めたい思いを述べている。同詩人は別作でまた といい、長旅の遊宦に倦きた詩人は清浄な山水に接し、 俗世 を 離れ

江南倦歴覧、江北曠周旋……想像崐山姿、

緬邈區中緑、

始信安

得盡養生年。

(謝霊運・登江中孤嶼

行、息必廬霍期。越海陵三山、遊湘歴九嶷(初発石頭城) 故山日己遠、風波豈還時。迢迢万里帆、茫茫終何之。

として誣告に遭い、帝はその無実を知り罪しなかったが、帰郷を許 を尋ねようと歌う。李善注は宋書を引いて、当時作者は致仕しよう 境三山に登り、古賢の入水した湘水を訪らっては古聖帝の陵山九嶷 ともいい、終りのない遊宦の苦愁に名山の羅浮・廬霍に遊んでは仙

さず臨川内史としたという。官界の紛騒を身に滲みて知り尽した詩

その思いは我が盛りの衰退と盛える都に帰れぬ憂愁と不安に深く寒 も根底において、それら文選行旅詩と無縁ではなかろう。 人は遊仙と懐古によって時の心境を表わしたのである。 してみれば、白鳳治世の聖地と仙郷吉野にかけて思う旅人の詩想 そして、

20

四 故郷を思うことは

俗世離れの指向性において遊仙思想と双生児の関係にあるのは隠

打ちされていること言うを俟たないであろう。

哲夫氏(全注巻五)は旅人の望郷詠に触れ、その「望郷の念は致仕 の意味で傾聴すべきであろう。 して田園に帰るねがいであったもののように思われる」といい、こ 遊仙趣向と共に田園隠遁の意思を流露するものも少なくない。井村 棲思想であり、その延長線上に田園隠遁思想がある。 文選行旅詩に

具体的に言えば、五首中そういった意思が汲み取れるのは③と見

が、「故りにし郷し思ほゆるかも」と歌うのはこの一首のみである。 られる。集中、「古・大和・都・家・妹」を思う歌は羇旅作に 多 い

する二句の語意について雅澄(古義)は「その物思ふこ と の多 く のよさも加わって、従来高い評価を受けている。「曲曲二」と 表 記 それに「あさぢはらつばらつばらにものもへば」という上句の音律

例は集中この外一例しか見当らない。 て、落る處なく委曲にしげきなり」と解し、最も詳細を尽すが、用

憶良の男の作といわれるもので、下句は恐らく旅人の歌を蹈襲し 朝開き入江榜ぐなる楫の音つばらつばらに吾家し思ほゆ(四〇

多分「鬱々多悲思、緜々思故郷」(魏文帝・雑詩)「眇々 孤 舟逝、 たのであろう。思えば歌語として旅人の創造にかかるこの表現は、

詩はその状態を「紆」といっている。文選注に西都賦の「歩甬道以 を意図したのではなかったか。望郷の憂愁または悲思の繁きことを 蘇々歸忠紆」(陶淵明・始作鎮軍参軍経曲阿作)といった 詩の表現 表わすのに「綿綿」というのは文選詩に他にも多く見られ、就中陶

同義であることを示す。よって「曲曲」という義訓語は「綿綿」と 同じことが知られる。 因みに前記の陶詩は続いて、

縈紆」を注して「縈紆、猶回曲也」といい、「紆曲」の二 字 は元来

……我行豈不遥、登降千里餘。目倦脩塗異、心念山澤居。望雲

に帰るという淵明流の隠遁思想を吐露している。また同じ文選行旅 と歌い、「我が行き」の千里もの旅途に厭き、やがて「山澤の居」 **慙高鳥、臨水愧遊魚。**真想初在衿、誰謂形迹拘。聊且憑化遷、 終反班生廬

> 詩にある彼の別作(赴假還江陵夜行塗口)も、 ……商歌非吾事、依依在耦耕。投冠旋舊墟、不為好爵榮。

Ł, 投冠して田園に隠遁する念いを述べている **衡茅下、庶以善自名**

するものがあること、更には淵明詩が憶良のみならず旅人(例えば を好むこと、老の歌から始まる当の歌群に文選中でも行旅詩と類想 思想が歌われることは行旅詩に多く見る。大宰府歌壇の大陸的風雅 このように、長旅の遊宦の憂いから抜け出す道として遊仙と隠遁

表現上の詩との類想性もさることながら、詩想においても前述の陶 讃酒歌)にも多大な影響を及ぼしたこと等を考え合わせれば、③は

詩等に通ずるものがあると見て間違いあるまい。

「人も無き」によって興されるように荒涼たる景観を内包 する。そ もあるのである。「古りにし里」という歌語は屢ば「うずら 鳴 く」 れが相聞歌に用いられる時、女側の家里の古びた様子を言い、また ところが一方、奈良朝人にとって飛鳥の故郷は白鳳治世の古都で

21

は男が家郷の荒涼たる情景を形容することもあるが、相聞歌を離れ

る場合、例えば田辺福麿歌集歌に、 三香の原 久邇の京師は 山高み 河の瀬清し ありよしと 人は云へども ありよしと 吾は念へど 古りにし 里にしあ

れば 国見れど 人も通はず 里見れば 家も荒れたり…(一

〇五九)

と荒都の廃墟を表わすのに用いられている。また同じ歌語の「古郷」 も古歌巻の題詞に、

和銅三年庚戌春二月從藤原宮遷於寧楽宮時御興停長屋原廻望古

む(七八) 飛鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあら

具山の古りにし里」と歌う時、古都の荒れ果てた情景もその瞼の裏ての飛鳥古京の原風景があったのではないか。だから、旅人が「香られる。ここに「古郷」が古都を指すことと共に、奈良朝人にとっの持統御製が後に奈良遷都時の元明御製に取り込まれたものと考えと見える。この歌は異伝があり、元来飛鳥京から藤原京へ遷都の時と見える。この歌は異伝があり、元来飛鳥京から藤原京へ遷都の時

く、時代が下るにつれ、荒れた都は、しかかっていたに違いない。なぜなら、荒都歌系譜を挙げるまでも都の荒墟化した光景のもたらす一層重苦しい悲哀が作者の胸中にの相むがため」という底に、故郷に帰れぬ憂愁もさることながら、古れむがため」という底に、故郷に帰れぬ憂愁もさることながら、古とすれば、続く倒で歌人は「忘れ草」を歌い、「古りにし里 を 忘

にありありと浮びあがったのに違いない。

世間を常無きものと今ぞ知る平城の京都の移ろふ見れば(一〇

四五)

いずれにせよ、続く⑤に初見する淵瀬変更の表現が普遍的無常観のからこそ彼は帰京を予知しながら吉野に不変を希ったのであろう。人はそこから奈良京のやがての荒都化を予想したかも知れない。だ力的で普遍的なものに盛り上げるのである。更に言えば、或いは旅る。それが我が盛りの衰退と相俟って歌人の覚えた無常感を一層強と歌われる如く、世の無常を象徴する典型的風景と化したからであ

大伴家の首長たる彼に政権を離れて世の栄枯盛衰と無縁のい出されの漢文学教養から田園隠遁の意思を流露することはあっても、僖族いわば、旅人は任地の異郷で不如意や失意の心境にあった時、そ

申し子であることは疑いない。

り、そして故郷即ち古都を思う二首を含む一連の詩想が望京に端をかったのである。ここに吉野を詠む一首で全体を結ぶ必 然 性 が あそれを逃れるため、結局文芸上の観念としての仙郷を求めるほかなる荒都は我が身の衰退に味わった無常感をいよよ深めるに過ぎず、安住すべき土地は実際にはなかったのである。故郷を思うにつけ思

五 五首の連作と長屋王の変

発することは五首の流れから明日に看取されるのである。

・モ」とし、隔首に同音を配することで詩の隔句押韻と完璧に一致詩的起承転結の構成を形造る。その上結句の最終音を「メ・モ・メゆ」と④「忘れむ」とで一転折を成し、(5が2)と呼応することで漢の」と④「忘れむ」とで一転折を成し、(5が2)と呼応することで漢の」と(4) 「忘れむ」とで一転折を成し、(5)が2)と呼応することで漢が、歌人は連作を意図したを通して見た。五首の詩想の流れを辿れば、歌人は連作を意図した旅人歌五首の趣向について、先述の如く作者の教養と表現の基底

纒わる盛衰の嘆きが五首の基調を成すことを示し、①は続く四首のる。そして⑸の「我が行き」は①の望京と呼応することで、望京にが一層強化され、⑸の仙郷隠遁の想念へと帰着するもの と 見 ら れは②を受けるのだが、それが④の傷古に伴う無常感の深化によって

するのである。因みに内容面では、③に見た懐舊と隠退の意思流露

序に当るといえる。

何故に起ったのだろうか。たが、それを旅人の身の上においてみると、先に見た作者の心境は旅詩と関係することで筑紫歌壇の風雅と軌を一にすることは既にみたて、このような構成と趣意を有する五首が詩想において文選行

そこで思い浮ぶのは、この作歌に先立つこと一ケ月余り前の天平

よる謀略であり、藤原氏が長屋王を執権者とする皇親政権に取って元年二月に起きた長屋王の変である。これは周知の通り藤原四子に

武帝登極に伴う吉野行幸に、旅人は中納言という高位の官人にして武帝登極に伴う吉野行幸に、旅人は中納言という高位の官人にしてで、旅人は王の側に立っていたと見る証拠はないが、旧族大伴家ので、旅人は王の側に立っていたと見る証拠はないが、旧族大伴家の方長として心情的には皇親政権と吉野行幸は長屋王が議政官の班首とな不比等政権下絶えて見られぬ吉野行幸は長屋王が議政官の班首とな不比等政権下絶えて見られぬ吉野行幸は長屋王が議政官の班首とな不比等政権下絶えて見られぬ吉野行幸は長屋王を執権者とする皇親政権に取ってよる謀略であり、藤原氏が長屋王を執権者とする皇親政権に取ってよる謀略であり、藤原氏が長屋王を執権者とする皇親政権に取って

幸の宮(三一五) けくあらし 天地と 長く久しく 萬代に 変らずあらむ 行み吉野の 芳野の宮は 山からし 貴くあらし 水からし 清 は異例の従駕歌を予作している。

長屋王を執権者とする皇親政権への嘱望でもあったはずである。托していると考えられてしかるべきであろう。更にいえば、それは現を踏えたもので、そこに天武直系の新帝に対し白鳳治世への夢を歌中「萬代尓不改将有」と表記されるのは、聖武即位の宣命の表

それだけに、長屋王の変は旅人にとって大きな衝繋であったに違

ないでもないが、それにつられて我が身を振返る時、旅人は寂寥感た老が都の盛況を華やかに歌い上げている。下僚老の気持が分からあった。目の前で同じ三月四日に、従五位下から従五位上に昇位しの班首となった。天離る鄙にいた旅人はその報を聞かされたのみで中納言任官歴も年も自分より下の藤原武智麿が大納言に進み議政官いない。事件後翌三月四日、都では大規模な叙位昇位が行われた。

違いないあるまい。 治の中枢にいた旅人は自身への不安も拭いきれないものがあったに治の中枢にいた旅人は自身への不安も拭いきれないものがあったにの栄枯盛衰の無常をまざまざと示しつけたのではないか。ゆえに政旦にして失脚し自尽させられたことは、何よりも人間または世の中を禁じえなかったのであろう。それに権力の頂点に立つ長屋王が一

が叶えられぬ時、旅人はもはや仙郷の山水への逃避に自らの心情をを祈うのは、吉野讃歌で歌ったのと同じ気持の流露であるが、それによって惹起された歌人の心境ではなかろうか。そして吉野に不変深い無常感は、正に白鳳再現の夢をもたらした王の皇親政権の失墜してみると、五首に見る望京の悲愁と不安と懐旧に裏打ちされる

六 おわりに

托すほかなかったのであろう。

なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしかも酒に 染み なむしていることをみた。この直後、旅人は讃酒歌十三首を作り、以上、五首において旅人が長屋王の変に遭遇した時の心境を吐露

世間の遊びの道に冷しくは醉哭きするにあるべくあるらし(三

(三四四

がりを見ることができるのである。
に巻三雑歌部に収められた筑紫歌群なかでも旅人の二連作の内的繋首に見るそれと根底において相通じること、言うを侯たない。ここ首に見るそれと根底において相通じること、言うを侯たない。ここで、といった憤世と失意と自棄の心情を一層激越な口調で歌いあげていといった憤世と失意と自棄の心情を一層激越な口調で歌いあげてい

もっとも、

望京歌でも讃酒歌でも旅人はその漢文学教養を発揮し

ももっともであろう。そして翌二年正月に大宰府で開かれた盛大なれは筑紫歌壇の風流であり、また時代の好尚でもあった。そのため旅人の政治姿勢と同一視することは躊躇われるのである。あれから旅人の政治姿勢と同一視することは躊躇われるのである。あれからながの政治姿勢と同一視することは躊躇われるのである。あれからないのとにもよるが、同時に、そ者が時政に敏感に反応するものが多いことにもよるが、同時に、そ者が時政に敏感に反応するものが多いことにもよるが、同時に、そ者が時政に敏感に反応するものが多いことにもよるが、同時に、それは、述志の伝統をもつ中国文学に詩賦の作つつ作歌している。それは、述志の伝統をもつ中国文学に詩賦の作

(八四八) 雲に飛ふ薬はむよは都見ばいやしき吾が身また変若 ち ぬ べ し 梅花宴に付して、旅人は、

後亡くなる前の「在寧楽家思故郷歌」では、変わりがない。この年の末旅人は大納言に昇進し帰京したが、半年かし、長屋王の変をきっかけに政権が藤原氏の掌中に帰したことはの旧豪族の氏上としてやはり朝廷を離れてはならないのである。しと歌い、仙薬よりむしろ京師に「変若」の望みを繋げている。大和と歌い、仙薬よりむしろ京師に「変若」の望みを繋げている。大和

ス ラ 須臾も行きて見てしか神名火の淵は淺びて瀬にかなるらむ(九 須臾も行きて見てしか神名火の淵は淺びて瀬にかなるらむ(九

流れているのである。 と歌い、淵瀬の変に寄する無常感は既に一種の諦念となって静かに

注

日〉への懐旧となる」とし、その望郷の情に〈都誇り〉(=鄙 菮 視)旅人の望郷歌を『望郷がなじんだ土地への懐旧を超えて〈生命の若き(2) 例えば、益田勝実「鄙に放たれた貴族」(『火山列島の 思 想』)は、(1) 伊藤博「古代の歌壇」(『万葉集の表現と方法』下)

-) 林田正男「小野朝豆老論」(『万葉集筑紫歌牂の研究』) は、老 の 歌影が見られると説く。 の思想に拠って立ちながら鄙に生きねばならぬ地方官僚貴族の苦悩の
- とそどでは三・四引の作とし、それに近り。(3) 林田正男「小野朝臣老論」(『万葉集筑紫歌群の研究』)は、老 の 歌
- 「こり次は、これで下(ミアト)貴所養吏が食とであとし、しと、 甬) 猶、小野老の三二八番歌について、北山茂夫氏(『万葉の世紀』)はを天平元年三・四月の作とし、それに従う。
- (5) 「梅花の宴群像」(『万葉集の比較文学的研究』)
- (6)「清き河内――吉野歌の問題」(同注(5))
- (7) 人麿従駕作の反歌に「見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることならまた還り見む」(三七)とあるが、それは土地讚め宮讃めの類型 にりまた還り見む」(三七)とあるが、それは土地讚め宮讃めの類型 にられる。
- 10)『萬葉集全注』巻第一(伊藤博氏担当)

爲陵谷乎」などとある。

- (11) 金井清一「旅人・憶良の時代」(別冊国文学『万葉集必携』79 春季
- 昭3・1) 大浜厳比古「歌人誕生〔旅人覚書その一〕」(『山の辺の 道』一〇、(13) 大浜厳比古「歌人誕生〔旅人覚書その一〕」(『山の辺の 道』一〇、(2) 清水克彦「旅人の宮廷儀礼歌」(『万葉』三七、昭35・10)
- 平成元・15) 拙稿「『大宰帥大伴卿戡酒歌十三首』考」(『藜文研究』 五十 六 号、4) 拙稿「『大宰帥大伴卿戡酒歌十三首』考」(『藜文研究』 五十 六 号、

補注

五首中、三三五番歌の結句について誤字説に基づく異訓が行われている

雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もがもった。 は、古野・飛鳥・が、小稿は、古典大系本等に見る非誤字訓説に従った。 一方、人際飛鳥・吉野」という配置は確かに渡瀬昌忠氏(「人麻呂に於ける贈 答歌した古くから指摘され、しかも結句の最終音が「ニ・シ・ス・フ」と二首でつて解析と近似する。当面の四百の横成を考えるのに参考となるのはも首転換構成と近似する。当面の四百の構成を考えるのに参考となるのはも首になっている。これは別稿(注(1)に同じ)で詳述した讃酒歌の同つ間になっている。これは別稿(注(1)に同じ)で詳述した讃酒歌の同つに続けている。当面の四百の構成を考えるのに参考となるのはも首が機成と近似する。当面の四百の横成を考えるのに参考となるのはも首の色を奪ひて咲ける梅の花早くな散りそ言は消ぬとも

詩人でもあったからである。 は、一般にような試みは旅人も短歌連作に対して行ったのではないか。彼は出そうとする努力でもあったのだろう。長歌から短歌への転換 期 に おいはただの詩論の模倣というより、固定化した短歌様式に一定の格式を見い時代が下ると、藤原濱成が『歌経標式』で頻りに短歌の韻をいう。それ

(付記)

しあげる。爾後も常時御指導、御教示を賜っている井口樹生先生に深く御礼を申る。爾後も常時御指導、御教示を賜っている井口樹生先生に深く御礼を申本稿は、昭和六十三年度に提出した修士論文の一部を加筆した もの で あ

こ しこう)